

Insider and outsider perspectives on the self and social world 自己と社会世界におけるインサイダー視点とアウトサイダー視点.

Cohen, D., & Hoshino-Browne, E. (2005). Insider and outsider perspectives on the self and social world. In R. Sorrentino, D. Cohen, J. M. Olson, & M. P. Zanna (Eds.), *Culture and Social Behaviour: The Ontario Symposium*, (Vol. 10). Mahwah, NJ: Erlbaum

Rep. 小森めぐみ.

世界を理解する

- ・ 自分の周囲で何が起きているのかを正しく知覚し、評価することは難しい
 - 人々は自分自身の知覚・現象学的経験と実際に“そこ”にあるものを分離できない
- ・ 関連する事象として、子供や成人に見られる自己中心的な志向、心の理論の発達、投影、自己の境界、知覚や認知に見られるナイーブリアリズムなどが検討されている。
- ・ 人は発達するにつれて、他者にも心があることを学習する
 - 自分と全く同じものを見ているわけではない（例えばピアジェの三山問題）
 - 知っているわけでもない（誤信念課題、e.g., Ruffman, Perner, & Parkin, 1999）
 - 同じ方法で世界を理解していることもない（様々な視点取得課題、e.g., Selman, 1977）
- ・ しかし、幼いころしていたような考え方に陥ってしまうこともよくある(Gilovich, Kruger, & Savitsky, 1999)
- ・ 人々は世界を自分のまなざしで見つめ、自分の持つ現象学的な観点から見る。そして、自分の頭の中のもの、他人の頭の中のもの、そして本当に“そこ”にあるものを混同する。
- ・ このようなとき、人は世界を内側から眺めている(inside-out)。
- ・ 多くの研究が人々の認知の性質を明らかにしている。そこでは自分自身の現象学がとても顕現的であるため、何らかのかたちで係留と調整をしなければならぬ。
- ・ しかし、人々の経験はとても強く、そして修正は弱いため、エラーが生じる(Gilovich, Medvec, & Savitsky, 1998; Kruger, 1999)

本章の内容

- ・ 本章では、この“inside out”の傾向が文化的なパターンであることを示す
- ・ 東アジアの人々はまったくちがう傾向をもつ。
 - 彼らが自分の頭から外に出て、自分自身の現象学的に汚染されていないかたちで物を見たり、“outsider”の視点で自分自身を経験する
 - 彼らは、inside-outではなく、outside-inの傾向をもつのもかもしれない
- ・ 本章では、東洋人と西洋人が自己と世界を全く違う方法で見ること、それが記憶の表現のされ方、線のイメージのされかた、他者の知覚、世界の性格描写で見られることを示す

The self and spectator (自己と観客)

- ・ 文化には同じ文化内の分散と文化間の類似性があることは非常に重要(Vandello & Cohen, 1999)
- ・ 東洋人も西洋人も世界を inside-out にも outside-in にも見ることができる
- ・ 西洋の学者達(e.g., Cooley, 1970;1902, Mead, 1934; Smithy, 1759/1984)は、人々が自分を“一般的他者”あるいは“公平な観客”の視点で見つめることがあると指摘している。
- ・ これは社会化の指標であり、自己統制の基本的なメカニズムでもある
- ・ “一般化された”他者の問題は西洋人にとっても東洋人にとっても重要で、彼らはどちらの向き

- からもものを見ることができる(Cohen, 2003)
- ・ しかし、文化に応じて社会規範が異なることから、デフォルトが異なるとも考えられる
 - 西洋は個人主義的な文化で社会規範がゆるいものに対し、東洋は集団主義的な文化で、社会的調和を重んじるタイトな社会規範が存在する
 - ・ そのためには自己の行動を制御し、文脈に応じて調整し、ふさわしいと思われる方法でふるまわなくてはならない(Morling, Kitayama, & Miyamoto, 2002)
 - ・ Heine, Lehman, Markus, and Kitayama(1999)は、日本では人々の期待に沿うことが重要と考えられていることを指摘
 - ここで重要なことは、社会基準にあうこと、集団から遅れないこと
 - この傾向は日本だけではなく、儒教的な伝統が強い国々ではどこでもみられること(例えば中国)
 - ・ もちろんこの傾向は東洋だけのものではない。西洋の客体的自己知覚理論、公的自己意識、自己客体化理論(e.g., Baldwin & Holmes, 1987; Duval & Wicklaund, 1972; Fredrickson, Roberts, Noll, Quinn, & TRwenge, 1998; Froming & Carver, 1981; Hass, 1984)でも同じようなことを言っている
 - ・ 日本の方がこれが日常的に実践されていて、全体的な傾向となっているというだけ
 - 教師や母親は自分を役割名で述べる Kitayama and Makus(1999)や Smith and Cohen(2003)
 - これは単なる言葉遣いの違いではない。自分を外から眺めることは、他者との調和をはかるうえで重要。これができなければ世界の見え方や他者からの見え方を理解できない
 - ・ 本章では、アジア系カナダ人とヨーロッパ系カナダ人に見られるインサイダー・アウトサイダー視点を検討した研究を紹介する
 - ・ 最初の3つ：アジア系カナダ人がヨーロッパ系カナダ人と比べて3人称を用いやすく、“一般的他者”や“公平な観客”にどう見られているかについて強い表象をもつことを示す
 - ・ 次の3つ：ヨーロッパ系カナダ人に見られるバイアスがアジア系カナダ人には見られにくいことを示す
 - ・ 最後の1つ：発達的な視点からの検討
 - ・ “公平な観客”の視点からものを見ることは特に社会的調和に貢献することから、見方の文化差は社会的な状況で特に見られやすく、そうでない状況では見られない
 - ・ くりかえしになるが、本研究ではあくまで特定の文脈における視点のデフォルトの文化差を検討する。
 - ・ さらに、この傾向は東洋人だけではなく、アメリカ合衆国内の黒人をはじめとする東洋以外の文化でもデフォルトになっている可能性があるが、それは本章の範囲外

A note on participants

- ・ サンプリングの問題は非常に重要。一部の学生の参加者がその文化の代表として選ばれ、実験されている。
- ・ 本研究では、Waterloo 大学のアジア系大学生とヨーロッパ系大学生を利用している。これは彼らがどの程度東洋、西洋を代表しているのかという問題や、東洋や西洋内の文化の違いを無視しているという問題を残すが、それでも東洋と西洋の違いを示すことができると考えられる
- ・ ただし、一般化には注意が必要

Empirical Evidence

The generalized other's perspective

- Mead や Smith は西洋で見られる “一般的他者” の問題を扱っていたが、これは東洋についてはよりあてはまるといえる
- 研究 1 では投影に注目する。
 - 多くの研究では人が自分自身の感情を他者に投影することが知られているが、これは東洋人よりも西洋人において強く言えるかもしれない。
 - 東洋人の場合は、一般的他者を習慣的に表象しており、それを投影すると考えられる（関係的投影）
- 研究 2、3 では outsider としての自己の見え方を検討する。記憶（study2）やオンラインの経験（study3）において、東洋や西洋の人々が自己をどのくらい outsider の視点から見つめるかを検討する。Nigro and Neisser(1983)参照

Study 1: Projecting the generalized other.

.